

「農ある暮らし～私の日常～」(2)

古屋富雄



農業で暮らしていた頃

過ぎし日の故郷はどこの家も農家でした
食べている物も着ている服も
お大尽以外はみんな同じでした
それが当たり前だと思っていました

田植えの時期は学校が休みになりました
勉強するより家の手伝いが
大切だったそんな時代でした
先生もしっかりやれと言っていました

あー 貧しかったけれど
貧しさなどは感じなかった
あー 白いおにぎりが
なんと美味しかったことでしょう

過ぎし日の故郷はどこの家も農家でした
食べている物も着ている服も
お大尽以外はみんな同じでした
それが当たり前だと思っていました

稲刈りの時期も学校が休みになりました
イナゴを取ってそれを売って
修学旅行の足しにしました
記念の集合写真は無邪気な笑顔でした

あー 貧しかったけれど
貧しさなどは感じなかった
あー 母の卵焼きが
なんと美味しかったことでしょう



農家の猫

昔の農家は大変でした
全てが人の手作業でした
田植えもしかり
稲刈りもしかり
家族みんなで汗を流しました

お米が大事な時代でした
猫がネズミの番人でした
我が家もしかり
隣もしかり
何処の家にも猫が居ました
ネズミを捕るのが仕事でした

今の農家は楽ですね
機械を使って作業をします
田植えもしかり
稲刈りもしかり
全て一人で出来てしまいます

お金がかかる時代です
猫はペットになりました
我が家もしかり
隣もしかり
ネズミを知らない猫たちです
こんな暮らしになりました



父の三十三回忌

今日は父の三十三回忌の法要です
久しぶりに親類縁者が集まりました
叔父や叔母もどうにか参列をしています
これが最後の顔合わせになりそうです

父さん月日が流れましたね
母はあなたが逝った
20年後に亡くなりました

厳かに供養のお経が始まりました
姉が供えた季節の花が綺麗です
お線香の紫の煙が漂っています
歳を取らない遺影が滑稽です

父さん月日が流れましたね
私もあなたが逝った
64になりました

父さん月日が流れましたね
孫七人、ひ孫五人が
あなたに向かって手を合わせます



里子おばあさんの夢

里子おばあさんは歳のわりに背の高い人です
鼻が高くて日本人離れした顔立ちです
里子おばあさんは町場育ちのお嬢さんでした
縁があって叔父と所帯を持ったと聞いています
分家の叔父は会社勤め
共稼ぎの生活でした
休みには本家の野良仕事を手伝ったそうです
こんな話しを聞いたのは叔父の四十九日のことでした

里子おばあさんは婦人警官になりたかったそうです
試験に受かって面接だけが残っていましたが
しかし家長の兄の許しがもらえず諦めました
日本で最初の婦人警官
こうして夢は消えました
夢は消えても優しい叔父が待っていてくれました
この人と一生共に暮らしたいと思ったそうです

子供を育て、家を立て
地域の役も受けました
定年祝いと言って二人でハワイに行きました
夢に見た沢山の思い出が走馬灯のように浮かびます
こんな話しを聞いたのは叔父の四十九日のことでした

